グローバル化ではなくインターナショナル化を

「大事なのはグローバル化ではなくて、インターナショナル化だ。」これは先般開かれたあるシンポジウムでの某パネラーの発言である。ここ10年近くも、当然のこととしてグローバル化が叫ばれているが、翻訳家でもあるパネラーによれば、グローバル化はまさに「地球は一つ」であって、世界人類皆同じ、国も何も関係ない、という発想であるのに対して、インターナショナルは、あくまでまず国があり、これを前提に交流が行なわれるものであって、両者は全くもって似て非なるものである、というのである。言われてみればなるほど、確かにこれまで何となく類似の概念として受けとめてきたが、ナショナルがあるのとないのとでは大違い、と至極納得させられたのであった。

目下、WTO交渉が行なわれているが、WTOの基本思想はグローバル化以外の何ものでもない。そもそも農業は気温、日照時間、降雨量、土質等々、自然条件によって規定されたものであり、国によって農業のありようが異なって当たり前である。アジアモンスーン地帯のような水田をベースとした集約的な農業があれば、欧米のように牧草、穀物中心で土地利用型の粗放的な農業のところもある。水田はきめこまかな水管理を必要とするが、種籾から生産されるお米の粒数は麦の数倍も多いといわれており、人口扶養能力も高く、集約的な農業である必然性を持つ。その稲作を、先住民族であるインディアンを追い払い、元来水が不足して水田としての利用が不可能なところに、灌漑施設を整備してはるばるシェラネバダ山脈から水を引いて、メキシカン等を使って大規模稲作を行なっているアメリカと同列に並べてコスト云々と言うほうがおかしいのである。

ところで、こうしたグローバル化的発想の根底には、要素還元主義が巣食っているように思われる。すなわち、物事すべては経済的、社会的、文化的等多様な要素からなる総合体であるにもかかわらず、特定の要素だけで分析的に解釈し、物事の全体をさも理解しているように錯覚しているものである。これは何もWTO、アメリカだけに限らず、現代社会のあらゆる領域が同様な流れに曝されているということが出来る。例えば人間についても、その学習能力も、仕事振りの、健康状態も何もかにもが、平均値もしくは標準値が設定され、それとの比較でしかその人間が語られなくなっている。そこでは人間が無機的な特定の機能、数値等に置き換えられて、顔も個性も感性も見えてはこない。人間の時代が謳われながら、最も人間が見えなくなっているのが現代である。本来は違っているところにこそ、おもしろさ、魅力を感じるはずであり、数値等だけでなく、個性、感性を輝かせ、人間性を回復していくことが求められるのである。

今、農政の大転換期を迎えているが、日本農業を細分化して部分最適化ばかりを追求しても、トータルすれば日本農業の将来展望が開かれるというものではない。このほど基本計画見直しにかかる中間論点整理が出された。経営安定対策等が明記されるなど画期的内容も含まれるが、基本的には、これまでのアメリカ型農業志向から脱皮し、我が国の特徴を生かし、適地適作を重視した我が国らしい農業のグランドデザインをまずは確立していくことが前提となるように考える。

(常務取締役 蔦谷栄一)